

「Aさんの感情の変化に対する配慮」 ～24時間生活変化チェックシートを用いて～

小規模多機能ホームあん 矢倉 日高 優希



▼ 当事業所について

当事業所が提供するサービスは、小規模多機能型居宅介護支援事業所という、訪問・泊り・通いを組み合わせて利用する、地域密着型のサービスである。

「通い」で顔なじみになった職員が「泊まり」や「訪問」の際にも対応するので、「環境の変化」に敏感なお年寄り（特に、認知症の方）の不安を

和らげることが出来るのが特徴。

しかし、日中は利用者や職員も多く賑やかな状況に対し、夜間は数名の泊りの利用者と1人の職員という変化がある。

▼ 対象者について

今回、対象となるAさんは、当事業所のサービスと他所のデイケアサービスを併用し、当事業所の利用時は、通いからそのまま泊まりを利用する。

昨年7月頃、Aさんは、居間で過ごす際に声を荒げることがあり、感情の起伏が激しく、それ以前と様子に変化しているように感じるようになった。

▼ 当事業所の理念

誰もが、人生において最後まで主人公である。

自分らしい暮らしを継続でき、安心して高齢期を迎えられる
理想の地域社会を実現する

この理念を実現するために具体的にどのように考え行動すればよいのかを示した、**100を超える「理念に基づくキーワード」**がある。

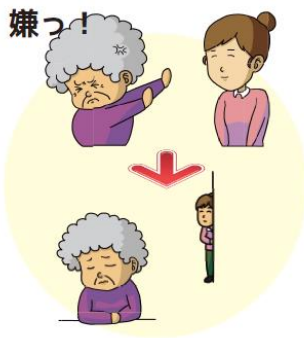
▼ 研究の方法

センター方式のD-4 焦点情報 24 時間生活変化シートを加筆・修正したものを使用し、変化するAさんの様子に影響を与えているものは何かを分析・把握したものと、自宅での様子を家族から聞き取った内容を踏まえ、Aさんの思いについて考え、その思いに対して「理念に基づくキーワード」を根本として、どのような配慮ができるのかを考えた。

その結果Aさんの状況は時間帯・身体的要因によって変化していることがわかった。

Aさんは普段、11時前に当事業所に到着する。

以下は時間帯による状況、心の動き、対策である。

【午前】

状 況 声を荒げることが多く、職員や他の利用者の声、テレビの音に反応している。

心の動き 自宅から事業所に移動する中でめまぐるしい環境の変化が起きていることが予測できる。環境の変化の中で、自身を守るために周りへの拒否反応を示しているのではないかと。

対 策 環境の変化についていけず、混乱している状況で、賑やかにすることは落ち着かないだけでなく、余計に混乱させてしまうことが予

測できる。

必要以上に傍にいることはせず距離を置くこと、話かけるときは明るく静かめの声で、ゆっくりと本人のペースで関わることを意識した。

本人が本人を守るための拒否反応を示しているのであれば、そこにわざわざ入り込むことは寄り添っているといえるのか。

キーワード：寄り添うとは、横にいることではなく、気持ちに沿うことである。

必要以上に近くに人がいることで、落ち着かなくなって環境の変化に馴染めなくなるのであれば、その気持ちに沿って、時に傍を離れてみるの方が、本当の意味での寄り添うことにつながると考える。

【午後】

状 況 比較的に落ち着いて過ごすことができるが、事業所が本人の家であると話すようになる。

心の動き 変化する環境に順応するため、本人が存在する空間を安心できる自宅であると認識しているのではないかと。

対 策 自宅では、静かな環境があり、子どもが出る番組がよく流れている。

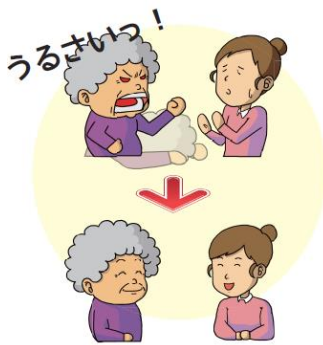
できるだけ静かに過ごせる環境を整え、ベッドで休める時間を作り、本人の好きな子どもや動物の動画を観るなど、自由にゆっくり過せるように関わった。

もしみなさんの自宅で、沢山の人がいて、それぞれに好きなことをして賑やかな空間になっていたら、落ち着かないし、人の家で勝手なことをされていると不快に感じるのではないだろうか。Aさんの心の事実が「今私は自宅にいる」ということであれば、賑やかな事業所の様子は不快な状況でしかないと思う。

キーワード：本人の今の心の事実に沿う努力をする。

そういった心の事実に沿うこと、自宅に近い環境を整えることで、落ち着いて安心して過ごせるのではないかと考える。

【18～19 時頃】



状 況 再び声やテレビの音に反応し声を荒げる。

他の利用者は自宅に帰り、職員も日勤から夜勤へと人が入れ替わる時間。

心の動き 本人の中で環境の変化が起き、さらに人が減ることや入れ替わることに不安を感じている。

対 策 人が移動することに意識が集中すると、不安を煽り、混乱することにつながるを考える。

本人の傍で話をすることや一緒に過ごす時間を持ち、人が減ることや入れ替わる状況への意識を少しでも違う方に向けることで、不安を軽減できるよう関わった。

【19 時を過ぎ】



状 況 「怖い」など不安を示す言葉へと変化する。

心の動き 送迎の時間が過ぎ、一息つくが、外が暗くなる時間になり、それに対しての不安が出てくる。

対 策 他にも泊まりの利用者がおり、夜勤の職員は1人の為、ずっと傍にいることはできない。できるだけ本人から見える所において、一人ではないということを伝え、穏やかな表情で明るく話しかけるようにすることで、不安を軽減できるように関わった。

【身体的要因】



状 況 Aさんは、リハビリパンツとパットを使用している。家族より、機嫌が悪いときはパットが汚れていることが多いという話があった。事業所でも、デイケアが盆休みなどで排便コントロールができず、お腹が張ってくる頃に声を荒げることがあった。

心の動き パットが汚れて気持ち悪い。お腹が張って気持ち悪い。

対 策 パットが汚れているときは早めに交換する。声を荒げるなどで交換が難しいときは、パットを抜くことでパットが汚れることに

よる不快感の軽減を図った。また、デイケアと協力し、途切れの無い排便コントロールを行った。例えば通勤の際に、車が混んでいたり電車が遅れていたりすると、仕事に間に合うか不安になり、電話をいれようかそわそわして、早く動いてほしくてイライラすることはないだろうか。また、出先で急に雨が降ってしまい濡れてしまって、着替えができずに気持ち悪いままの状態を楽しめなかったりすることはないだろうか。Aさんも人が減ることや外が暗くなることへの不安・パットが汚れている不快感・排便困難への不快感。

キーワード：喜び"楽しみの前に"不安"不快"を取り除く

それらを感じているとき、それらに意識がむいているときは、落ち着いて過ごすことはできないだろう。それらの不安や不快をできるだけ取り除くことで、落ち着いて過ごせるのではないだろうか。

【生活を通して】

私たちは、いろいろなことで喜怒哀楽を感じながら生活している。

たとえ認知症になっても、たとえ身体が動かなくなっても、感情を感じることはできるし、その感情があつての生活は続いて行く。

キーワード：喜び、怒り、哀しみ、様々な感情があつての"生活"である。



私たち介助者は、その時々感情に沿った当たり前の生活ができるよう、関わっていく必要があるのではないだろうか。感情を当たり前に感じること、それに当たり前に沿う関わりをすることで、その人がその人らしく生活していけるのだと考える。